

### 愛するいと、働くいと

(「テサロニケ四・九〜一二」)

来年の修養会の候補地選びを兼ねた教区委員会。折角来たのだから少しでも楽しもうということでも盛り上がった。とはいえ酒たばこは敬して遠ざく我らがアッセンブリーの牧師たちだ。となればゆく方向はどうしても「食べる」になる。それが良くなかった。特に二日目はソフトにジュース、とどめは大量の釜めしと糖とデンプンのオンパレードと完全に自分を甘やかしてしまった。翌朝、体重に乗ると何と二日で一・五<sub>キ</sub>増。戻すためにまた節制だが、これがまた大変。自分を愛するのは大切だが、甘やかさないけないという思いをあらたにした。

### 一、互いに愛し合う

まずパウロは兄弟愛を実践することを要求している(九節)のだが、面白いのはパウロがテサロニケの兄弟姉妹たちが持つ兄弟愛の源泉に注目していることである。先の二章などを見ると、パウロ自身もこの教会に對し父のごとく教え、母のごとく愛していたかを見ることが出来るのだが、パウロはそれらの愛の行動が自分から出たものだとは全く考えていなかった。むしろ彼はそれを神から教えられたものと考えた。聖書に啓示されている真の神は愛の神である。そしてその愛は父なる神が世に送られたみ子イエス・キリストの存在と行動によつて明確にされている。パウロが求めた兄弟愛とはこの神の愛、即ち利害や取引とは無縁な、それでいて御父がそのひとり子を差し出すような、実のある愛の実践である。以前にも述べたようにこの主の愛に触れ、変えられたテサロニケの兄弟姉妹たちはそのような愛の行為をすでに近隣の教会に十分にしていたのだが、パウロはその行為を称賛しつつより高いものを求めた。人間世界であればいずれは枯渇してしまうようにも見えることだが、神の愛は無限大だということを考えるとき、私たちが神の愛をしたい求め、そこにこの身をつなぐなら、神の愛の光をこの世に輝かすことが出来るのである。

### 二、汗して働き、品位ある生活をする

もう一つの要求は何か。これが実に面白い。一一節には「自分の仕事に身をいれ、自分の手で働きなさい」とある。つまりパウロの信仰生活は実生活と直結しているのである。当時の教会は、四章後半に見るように、イエスの再臨を急迫したものと捉えており、その緊張の中である人々は「どうせ世は終わるのだから」といって真面目に働かず、怠惰に流れるという風潮があつたらしい。また中には兄弟姉妹たちの与える愛にあぐらをかき、自分ばかりもせず「わかってください。愛してください。食べ物ください」といった具合に共同体に寄生するような人間がいたようなのだ。對してパウロは自らが昼夜の別なく働くことをもつて模範を示すのみならず(二・九)、彼ら信徒にも汗して働くことを要求した。さらに一二節では働くことの目的が示される。それはイエス・キリストを信じていない人々に対して品位を持つて歩む(新共同訳)ことであり、また自らが窮乏することのないためであつた。要はパウロの説くキリスト教信仰はハワイトカラーの頭の体操ではなく、汗を流し労働する生活の中に結実する質実剛健なものだつた。だからこそパウロは「歩む」という日常生活を強く思わせる動詞を用いて信仰を表現したのである。

\* \* \*

「イイカ、ワタシノ話ヲ聞ケ。今ハ大事ナ時ダ。酒ヤ夜遊ビニイレアゲタラ、ダメダ。アソビハ引退シテカラ、イイネ？」このコーチの助言を受け入れた男は程なくその拳で栄光を掴み、日本人の希望となつた。その後も四度の防衛を果たしたのちチャンピオンの座を譲つた。そして訪れた引退の日。感謝を述べた彼にコーチは以下のことばを伝えた。「ヨシオ、オレイワイウノハワタシノホウダアリガトウ。サアヨク聞キナサイ。今ヤオマエハ青少年ノアコガレダ。ソノオマエガ、サケ、オンナ、カケゴト、ハズカシイコトヲシタラドウダ、ミンナカナシムネ。ダラシナイ生キ方ハイケナイヨ」青年はこの言葉を忠実に守つた。彼は誘惑の多いボクシング界と距離を置き、実業家としても成功。いつもダンディで凛とした生き方を貫いた。ご存知白井義男さん。日本初のボクシング世界チャンピオンにして一流の紳士である。またカタカナ語の主はアルビン・カーン、白井を育てた名伯楽である。カーンは白井の人生のコーチであつた。友よ、キリスト者の人生は訓練であるが、主に信頼し、その励ましに身をゆだねるなら大丈夫だ。互いに愛し合い、よく働いて神の栄光を表そう。